

有珠山は洞爺カルデラができたあと、およそ1.5～2万年前に生まれた火山である。噴火を繰り返し、7～8千年前には山頂部で大崩壊を起こし、岩なだれは噴火湾まで流れ込んだ。その後、長い休止の期間をおいて寛文3年（1663）に再び活動をはじめた。それから現在までに8回以上の噴火の記録があり、国立公園に指定されてからも、昭和52年（1977）と平成12年（2000）の2回、噴火している。

平成12年の噴火は有珠山西方山麓で発生し、温泉街に近い金比羅山などに新しく火口が開いた。このため国道が破壊されて通行不能になり、金比羅山からは熱水が噴き出し、泥流となって温泉街まで到達した。また、地面が70mも隆起するなどの地殻変動で家屋や道路・鉄道の損壊が多発した。噴火後に設置された散策道からは、い

まも水蒸気が立ち上る火口や、破壊された国道や家屋の遺構を見ることができる。このように、有珠山は日本で最も活動が活発な火山の一つである。

うそをつかない山

歴史時代の有珠山の噴火は、その前兆となる地震や地割れの発生、爆発的噴火に続く溶岩ドームの出現など、現象に規則性がある。このため、研究者は有珠山を「うそをつかない山」と呼んでいる。有珠山周辺ではこれまで、噴火予知をめざした火山活動の観測や研究が活発に展開され、また、災害時の被害を予測するハザードマップの作成や減災対策も進んでいる。平成12年の噴火では、噴火の前に緊急火山情報が発表され、住民1万6千名の避難が事前に的確に行われ、死傷者がなかった。

有珠山 今も続く活発な火山活動

洞爺湖周辺地域エコミュージアム 火山と共生するまちづくり

有珠山の直下にある洞爺湖温泉や壮瞥温泉は、明治43年（1910）の噴火後に温泉湧出が発見され、発展してきた街だ。その後3回の噴火を経験し、被害も被っている。

平成12年の噴火の後、洞爺湖町は泥流を逃がす流路工の整備や学校などの移転を行い、災害に強い町作りを進めた。また、同町と伊達市、壮瞥町、豊浦町は一体となって、災害の遺構を観光事業に活用したり、歴史や科学知識などを学び、火山に対する理解を深める学習活動を行ったりしている。そして、地域全体をエコミュージアム、つまり「自然の博物館」として整備し、地域振興に役立てようとする取組みを続けている。

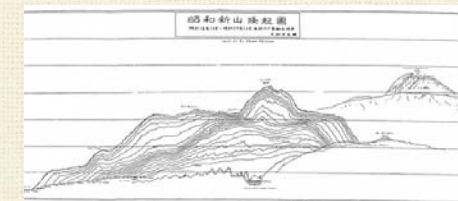
これほど多くの人々が住む地域が、活動の盛んな火山にこれほど近接している場所は、世界でも希であろう。ここに住む人々は、火山が作った美しい風景と温泉の恵みを楽しみ、火山の存在に積極的に向き合いながら生きている。まさに「火山と共生する」地域といえよう。



有珠山噴火（2000年）

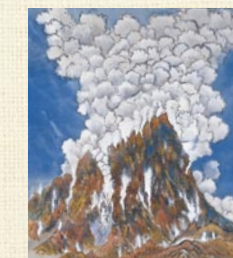
Column

昭和新山とミマツダイヤグラム



第2次大戦中の昭和18年（1943）12月、強い地震に始まった有珠山の活動は、同19～20年（1944～45）にかけて

山体東方の土地を隆起させ、標高407m（当時）の寄生火山・昭和山を作り出した。地元の郵便局長三松正夫（1888～1977）は、この間600日あまりにわたって地形変化などの観測を行い、くわしい記録を残した。特に、毎日の地盤の隆起と溶岩ドームが成長する状況を独自の方法で定点から記録した図は、戦後昭和23年（1948）の国際火山会議で発表され、火山成長の過程を記した世界最初の記録として「ミマツダイヤグラム」の名で有名になった。



画・三松正夫



昭和29年頃の昭和山

噴火する有珠山と洞爺湖温泉街（1977）